

俺は、援助交際が好きなただのおっさんだ。  
某SNSで知り合い、ホテルで落ち合った。  
なかなか可愛い子だ。

今日のお相手は、ツインテールの妹系少女。

「喉渴いてない？何か飲む？」

「ありがとうございます。  
でも気を使わなくて大丈夫ですよ」

中々愛想も良くて、好印象だ。

とき

ヤマト

「そうっでもいきなり……っていつのも何だし、  
少しお話しよっか」

「はい。私もその方が緊張しなくて助かります」

笑顔で取り繕ってはいるが、少し緊張している様子だ。あまりこういうことに慣れていないのだろうか

「ハンドルネームは『メイ』ちゃんだったよね。本名も『メイ』なの？」

「はい。芽生えるの『芽』に、衣服の『衣』です」

「可愛い名前だね。もちろん、外見も物凄く可愛いけど」

「えっ……そうですか？……なんか照れますね」

（ハハハ）

「あんまりこういうこと言うのもなんだけど、今まで援〇してきた子の中で、芽衣ちゃんが一番可愛いよ」  
「またまた、冗談がお上手ですね」

少し緊張がほぐれたのだろうか。先ほどの固い表情は少し消え、嬉しそうにしている。どうやらまんざらでもない様子だ

「会う前はどんなギャルなんだろって思ってたけど、全然優等生って感じたよね」

「えー、そんなことないですよ。私、勉強嫌いですから」

「へー、なんて援交やろうと思ったの?」

「…えっと…話題作りですかね」

「話題作り? そんな軽くやっちゃうもんなんだ」

「友達結構やっていますよ。」

「今何人とやったとか」**「ONEでリアルタイムに自慢してますから」**

「そうなんだ(さすが今時の子だな…)」  
「ちなみに芽衣ちゃんは何人目?」



「…お兄さんが一人目です」

「そうなの？じゃあ俺がはじめての援交相手なんだね」

「は…はい、そうです」

「そっかあ、彼氏とかいてなかなか援交に手を出しにくかったとか？」

「…いえ、彼氏は今までずっといません」

「えっ、そうなの？もしかして、処女とか…？」

「はい…。すまぐ言いにくいんですが…」

友達の間でも私だけ経験なくて  
少し仲間外れにされてて…それで…」

「マジで？可愛いし普通に普通」彼氏とかできたらうなの」

「…普段は無理に頑張ってるだけで、本当は内気で  
人と話すのが苦手ですから。コンプレックスの塊ですし、私に彼氏なんて、無理ですよ」

「コンプレックス？そういう風には見えないけどな…  
例えばどんなところがコンプレックスを感じてるなって思っの？」

「胸とか、ウエストあたりが気になりますね。  
特に私だけおっぱい小さいので…」

「そんなに同級生のおっぱいは大きいの？」

「みんなEカップ以上はありますね」

「へえ。(どんな同級生なんだ…)」

「…こんな子、嫌でしたか？」

「いや、全然？」

むしろ処女なんて、ラッキーです。

「…ということとはつまり、友達の間で何人とやったとか  
自慢しあってるけど、自分だけ経験なくて仲間外れにされて辛いから、  
いっその事処女を捨てちゃえと思ったとかそういう感じかな？」

「…はい。そんな感じですよ」

俺からすれば、結構くだらない理由で大切な処女を捨ててしまうなど  
思ってしまう訳だが、彼女にしてみればその事で仲間外れにされている方が  
断然嫌なのだろう。彼女のように学校で自分を無理に作っている人間は  
なおさらそう思ってしまうのかもしれない。

「そっかあ、それじゃあ早く経験しとかないとね。」

大丈夫だよ。俺は色々知ってるから優しくリードしてあげられるよ。

これで明日から友達に自慢できるね」

まあ、俺はこんな可愛い子の  
処女を奪えるのだから  
ありがたいことなのだが。

「ありがとうございます。 (処女を捨てちゃうなんて  
初めは相手の顔もわからないし不安だったけど、  
なんかいい人そうてよかった...)」

